

23PO-am404

柿蒂湯の抗痙攣作用に対する低用量 D2 遮断薬の併用効果の検討

○川俣 愛¹, 内田 樹¹, 小林 徹也¹, 野澤 (石井) 玲子¹ (1 明薬大)

【目的】吃逆には、メジャーランキライザーや抗痙攣作用のあるベンゾジアゼピン系の薬物が使用されているが著効を示す薬剤は少ない。一方、柿蒂湯は柿蒂、生姜、丁子からなり、古くから吃逆に用いられてきた。これまで当研究室では、柿蒂が抗痙攣作用を示す事を報告している。また、全身性ミオクロヌスに有効であると報告もなされている。そこで今回、鎮静作用が認められない低用量の D2 遮断薬のクロルプロマジン、メトクロプラミドと併用した場合の抗痙攣作用について検討した。【方法】マウスにメトクロプラミドを経口投与またはクロルプロマジンを腹腔内投与後、柿蒂湯を経口投与し、痙攣誘発作用のあるペントトラゾール、ストリキニーネ、ピクロトキシンをそれぞれ腹腔内投与し、間代性痙攣開始時間、死亡までの時間を計測した。【結果】ペントトラゾール誘発痙攣において、柿蒂湯 1 回量、1 日量ともに抗痙攣作用が認められた。低用量の D₂ 遮断薬は、マウスに対して鎮静作用が認められなかった。さらに、柿蒂湯 1 回量と低用量メトクロプラミドの併用または、低用量クロルプロマジンの併用投与で死亡時間は有意に延長された。ストリキニーネ、ピクロトキシン誘発痙攣においては、柿蒂湯 1 日量とメトクロプラミドの併用で死亡時間が延長した。【考察】1 回量、1 日量と柿蒂湯の投与量が増えるにつれて抗痙攣作用が増強されていることより、用量依存的に痙攣誘発時間を延長させる可能性がある。ペントトラゾール誘発痙攣に対して、1 回量の柿蒂湯と低用量の D₂ 遮断薬の併用で抗痙攣作用が認められた。以上のことから、吃逆治療において吃逆治療の第一選択薬である D₂ 遮断薬に柿蒂湯を併用することで、D₂ 遮断薬の減量とその副作用軽減が期待できる。